

昭和66年2月1日 第5種郵便物認可  
平成22年1月1日発行（毎月一回発行）  
発行所 沖 発行所 1号



# 沖

俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

# 節目

能村 研三

## 文化、冬の時代

子の名みな母音が響き菊日和  
脚立より梯子に替へて柚子一果

枯蔓の性根すわりし巻き絡み

地下鉄の乗換へ上手十二月

テレビのニュースでしきりに報道されているのが「事業仕分け」。専門分野の担当者などを前にして、「仕分け人」なる政治家や、学識経験者などが、ばさばさと仕分けていくのだが、これに嘸みついたのがノーベル賞受賞者や、音楽家たち。一向に景気動向が向上かないままの社会状況の中、文化の世界にも、「費用対効果」や「効率性」という言葉がむやみに迫ってくる時代である。文化は確かに、生活の中で食う足しにはならないもので、ややゆとりがある時の贅沢なものと思われがちで、こうした不況時代には、中々理解が得られず、財政的な支援が打ち切られてしまうのが現状である。

しかし、こんな時代だからこそ文化の果たす役割が大事なのである。文化に関わる国の予算などは、全体から見れば、たいした数字にはならないはずであるが、容赦なく切り込んでくるのが今の世の中。文化は正に「冬の時代」に突入した感がある。文化は、萎えた人々の心を癒し、生きる勇気を与えてくれるものであるはずで、「未来への投資」と考えるべきであろう。

着ぶくれて役職呼びの期限見ゆ

湯浴み子をささげ渡せし聖夜かな

数へ日や全体重でつぶす箱

行き違ふ手紙来てをり日短し

火の香もて人をもてなす除日なり

生涯の節目濃くして去年今年

俳句の世界においても、何かこの「文化の冬の時代」の影響が及んできているようにも思う。せめて、座の文学である、俳句の世界では、人々の温かい触れ合いの中、大きな自然から受ける力を大切にして、時代の荒波に押し流されないよう、守っていききたいと思う。

新年早々、やや悲観的な話になってしまったが、「沖」の四十周年の節目の年を迎えるにあたり、俳句や文化の世界にも、春の日が差し込んでくることを期待しつつ私たちも頑張っていきたいと思う。

能村 研三



# 蒼茫集

冬麗の 千田百里

芒原てふ月光の置きどころ  
うさぎ居る月や裏には亀をらむ  
眠りつつ甲信統ぶる八ヶ岳  
冬日一閃信玄か謙信か  
翔先生さよなら胡桃握りしめ  
冬麗のかの世もあるがままですか

北杜行 北川英子

星座表も入れて初冬の北杜行  
山に雪来て深鍋のとろとろ火  
声低く男ら集ひゐる獵期  
喪ごころの雨や葡萄の末枯葉  
神還りしあとの八つ岳雲に閉づ  
信玄の湧水治水冬あたたか

信玄棒道 杉本光祥

台風を突きて飛び立つ一番機  
エンジンの音せぬ車秋深む  
阿夫利嶺に夕影さして新豆腐  
面影の先師に似たる秋遍路  
八ヶ嶺の高きに合はせ鳥渡る  
信玄棒道冬將軍来るか

冬はじめ 安居正浩

綿棒にかすかなぬくみ冬はじめ  
首出してゐる蓑虫は泣くためか  
悪筆を風の囃して敗荷  
地球儀の傾ぎ日本のいわし雲  
柚子は黄に童話の国の入口に  
旅立ち榊林先生は胡桃の部屋の鍵閉めて



霽れやかに

藤森すみれ

山国の空霽れやかに冬に入る  
新酒酌む指の先まで明るくし  
あぢさゐの枯れきれぬ色小町塚  
一人には一人の小径冬紅葉  
返せるもの土に返して雪を待つ  
冬耕す身内のやうな山の風

隠れ花野

久染康子

迂回して隠れ花野に出合ひけり  
石一つ三分の一湧水の叡智脈々水澄めり  
翔先生の生地この先露けしや  
すすき原行く両の腕を懼として  
甲斐に入る軒に二重の柿簾  
砂漠シルクロード美術館の絵など見て時雨籠りかな

高気圧

菅谷たけし

張り出してゐる高気圧胡麻叩く  
後の月猫が溝板鳴らしけり

秋水を布截つごとく鯉の鱗

貼絵めき紅葉の八丁出島かな

胸に師の喪を抱く旅の蔦紅葉

庄内てふ夫婦の店の温め酒

プラチナ

辻美奈子

首寒くして葬列のただなかに  
炉開の椿ちひさくひらきけり  
園児みな日向くさしよあきざくら  
雪女郎ゆびはプラチナほど冷ゆる  
魂送るごとく焚火を高うせよ  
父なくて旧姓のこる芒原

落葉松

森岡正作

勝ち負けの両者に釣瓶落しかな  
紅葉を言はず空気の甘さ言ふ  
小鳥くる洒落たネクタイ渋い帽  
落葉松のいつか来た道冬ぬくし  
甲斐を行く猪撃つ音を間遠にし  
冬ざるる人の暮らしの丸見えに

ひとり遊び

荒井千佐代

さまざまな骨の散らばる秋渚  
二人ゐて一人遊びや赤のまま  
かまつかや抱けど背負へど泣くばかり  
後続の走者途切れし照葉かな  
にはとりのよく鳴く背高泡立草  
北塞ぐ心はとうに塞ぎけり

小春の日差し

樋口英子

立冬の落日赫つと八ヶ岳を染め  
鷹舞つて八ヶ岳威儀を正しけり  
吊し柿盆地は日暮やすきかな  
木の実独楽大きく反転くり返す  
畳屋が小春の日差し裏返す  
秋思とも齡ともただ座してをり

散る光

武藤嘉子

抜きとりて草の朝露したたらす  
花眼まぶし豊かにまるき芋の露  
藁の香のむんむんとくる刈田道  
降りいでて肩重くなる一の西  
冬霧の晴れゆく山河師を悼む

落葉松のいま散り急ぐ光かな

無畏

秋葉雅治

身を締めむ冬立つ朝の抹茶粥  
職退いてはたとせ無畏の冬帽子  
助六にならふ鉢巻かぜ心地  
遺言のためし書きとも日記買ふ  
賀状書く久しき珍うずの繁体字  
瞬瞬の身の翔けて永かり冬銀河

月高し

望月晴美

連山を鎮め虚空に月高し  
草の実の飛んで学舎影もなし  
新米にふるさと日和しのぼる  
聞き役は励ましの役梨を剥く  
曼珠沙華夫の一世の色ならむ  
幾重にも山ある安堵冬紅葉

総の山

松井志津子

地下街を出て襟合はす十三夜  
秋の夜の吊皮ひとつ違ふ揺れ  
まだ訛る夫と同郷赤のまま  
手入れ後の松の高きに白鳥座

浦住みは島住みに似るいわし雲  
冬に入る丈を競はぬ総の山

時雨雲

鈴木良戈

先生の乗られて速き時雨雲

林翔先生逝去

雪吊の縄しゆるしゆると空へ伸び  
抜け道を風と通れり葛の花  
夜の秋眼鏡の重くなりにつけり  
身に沁むや診察番号呼ばれをり

銀翼

大畑善昭

懐林翔先生二句

成すべきは成し菊月に身罷れり  
身に入みて恩沢のこと忘れまじ  
落款の朱の色を褒め文化の日  
針ほどの銀翼がゆくすすきの穂  
マンシオンは都会の森よ秋没日  
返済は迫らずに待つ竜の玉

穴賢

上谷昌憲

結界の自然薯を掘る穴賢

一滴の辣油ひろぐる冬はじめ  
木守柿雨の雫のとめどなし  
毒舌も薬味の一つふぐと汁  
冬銀河深林 林翔先生享年瞬の九十五  
残菊や先生黄泉も雨ですか

枝打つて

中尾杏子

鳥わたる峽に四五戸の湯花小屋  
神留守の暁の湯けむりちぎれ飛ぶ  
邂逅の目尻に老いや木守柿  
枝打つて神杉いよよ真直ぐなり  
日記買ふこの世いまだに面白し

冬銀河

河口仁志

栗拾ふいつもうしろに父のこゑ  
遅れ歩のつひにひとりとなる花野  
じやんけんではじまるあそび冬日向  
呼べど呼べど遙けくなりぬ冬の雁  
寒禽の瞬時のこゑやそれつきり  
檄とばす師はもう在らず冬銀河

# 潮鳴集



十三夜

堀口希望

一代に興し畳みて十三夜  
もの潜む気配月下の芒原  
口切の茶筌にのこる野のみどり  
無為といふ快樂ありけり小六月  
光年を隔てし師なり冬銀河

右袖

高橋ちよ

右袖の暮れ残りたる菊人形  
秋草に水位の跡のあらはなり  
上五の句畳まれしまま秋扇  
花石路に検針も歩をとどめけり  
子等よりて百一歳を祝ぐ立冬

シラノ

鳥居秀雄

星月夜バンドネオンの鉦数  
鳥渡る霞ヶ関に離宮跡  
ラ・フランス鼻のシラノの恋の香や  
秋灯や翔先生の二階窓  
長き夜の目のなき魚の安けさよ

どこまで行けど

栗原公子

秋夕焼どこまで行けどこの世なる  
自転車をこぐ秋天にとどくまで  
秋桜風あるやうに活けにけり  
長き夜や詩の種ひとつ書きとめて  
秋まつり小江戸佐原は川の町

## 骨董市

(自選二十句)

森岡正作

枯野行く皆無頼派の顔持てり  
喋らせてみる短日の電子辞書  
牛歩よし大地を確と大旦  
花びら餅夢の続きのあるやうな  
賽銭のこつんと寒の懐へ  
速達の赤の眩しさ合格す  
やうやくに子の離れ行く春北斗  
昭和とは麻酔のごとし春の雪  
雛に逢ふ雛の高さに身を低め



座るだけでよしふらここに父想ふ  
悪友が逝く裏山を笑はせて  
直に生き英傑の地の青き踏む  
田水引く先頭の水嬉しさう  
青梅雨の底けぶりゆく最上川  
半生のうかと過ぎけり冷奴  
もう吊らぬ蚊帳ふるさとのがらんどう  
心太黙つてばかりもゐられまい  
かつかつと西日を下駄で刻み来る  
骨董市戦後のやうに灼けてをり  
どこからか子が湧いてくる盆踊

# いつからの

(自選二十句)

菅谷たけし

臘梅の臘の溶けゆく鏡晴  
白梅や老境といふ第二幕  
春コートうれしき話匿しをり  
春月や百歩の距離に子等の家  
肩上げのとれて浴衣の柄合へり  
祭来る町にこんな子供たち  
風暑し鯉に乗り上ぐ鯉の口  
藺座布団大役置いてゆかれけり  
打水やこころの中を風通る



朝ぼらけ帰港の鯖火群れを解く  
水澄めり真昼を眠るホームレス  
豊年のまんまん中のコンバイン  
曼珠沙華ふつと思ふは千田百里  
秋雲やゆるく優しく手話の語尾  
綿虫や母の喪の日にどこか似て  
灯の辻に方位失ふ酉の市  
人間に冬眠といふ術なかり  
孵化すごと白鳥の首目覚めけり  
寒禽の地を啄みて地へこぼす  
いつからの二足歩行や霜柱

『泡の音色』

(自選二十句)

小嶋 洋子

緑蔭を行けば深海魚の気持  
鯉のぼり見える位置まで後退り  
魔女になりたき子の髪に月明り  
大寒の父の手紙の箇条書き  
銀食器落とす春愁かと思ふ  
バトン受け取りて九月の風となる  
離陸機が光に変はる雲の峰  
日向ぼこ不意に一人を恐れけり  
チェリー酒の泡の音色や星祭



軽石の帰るとすれば夏の月  
しまうまに草食といふ涼しさよ  
雪吊りに奏でてみたき百の弦  
レインボーブリッジあやとりのかたち  
泡のまま乾く石 齧 春浅し  
春の闇つなぎ回送列車かな  
糊しろのやうなる九月尽きにけり  
春愁やトレンチコートの内釦  
指先を岬と思ふてんと虫  
星合や記憶は濾過をくりかへし  
六本木風に磨かれゆく聖樹

# 年間二十句

主宰選

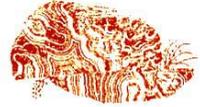
## 七種年男

枯蔓引きこの星すこし回しけり  
黒葡萄小さき野心のありにけり  
鰯捌く漁師言葉の生一本  
いたはりといふ色あらば冬桜  
去年今年旅人算のやうなもの  
トンネルを抜けてトンネル春の雷  
鱒東風佃は江戸の復元凶  
生真面目な折り目の残り紙雛  
春光をくるくるくるぼんと象の鼻



蛸壺に菜の花活けて島の宿  
朝礼の五月の言葉透きとほる  
デイケアの午後の静けさ額の花  
引力に逆らはず逆立ちの汗  
居るはずの畑に母ぬぬ大夕焼  
蜘蛛の囿に蜘蛛囚はれている如し  
暁光を受信中なり蓮の花  
大地よりストロー伸びて曼珠沙華  
糸とんぼ風に小骨のありにけり  
秋風の絡むペダルをぐつと踏む  
小鳥来る单身赴任を解かるる日

# 沖作品



## 能村研三選

千葉

峰

幸子

月の道行先秘せるバスにあり  
松手入幹をひと撫でて始む  
藤の実の触れ合ふ音や空まさを  
置く扇要の房の絡みけり  
小鳥くる潮の匂へる城下町  
富有柿吉野の風は煽やかに  
水指も喪もセーヴル神の留守  
鶴来たる声の一本調子かな  
しぐるるや琵琶湖は足袋のかたちして  
やつちや場の男の匂ひラ・フランス  
鉄橋に列車を乗せて紅葉川  
芋の露空一枚をまんまるに  
足を組む女は強し一位の実  
穴まどひざらつと舌に残るもの  
棒切れを持ってばやんちやに赤とんぼ

大阪

望月木綿子

神奈川

福島

茂

千葉

座古

稔子

プリウスで来て岸壁に鯨を釣る  
構造式のやうに連なる木の実かな  
鯛割くわれ生え抜きの銚子つ子  
草の露きらりと一カラットほど  
要職にありしは昔ちやんちやんこ  
剃刀の刃を替へあぐむ厄日まへ  
どんぐりの透けて母子のレジ袋  
風に色ありC Dの鳥威  
鳥渡る火照り残りし耕耘機  
胡桃割る寡黙な父と無口な子  
一枚の学校田の案山子かな  
鯖鮎の焼くるにほひや小座布団  
遙かより声が声呼ぶ花野かな  
遠洋へあす出る漁夫と菊脛  
夜なべする母にすすきの匂ひせり

岩手

浅沼

久男

鶴見

遊太

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

月の道行先秘せるバスにあり 峰 幸子

団体旅行でよく旅行社などが企画する「ミステリーツアー」と言うものであろう。旅に新鮮さと驚きを与えるために敢えて目的地に到着するまで目的地が解らないようにするものである。お正月に、デパートなどで行う福袋セールの旅パッケージといったところか。お仕着せの旅に飽きた心の余裕をもった人には少しスリルもあって面白い企画であるだろう。月が煌々と照らす道を進んで行くバスには大きな夢が膨らんでくる。

しぐるるや琵琶湖は足袋のかたちして 望月木綿子

琵琶湖の形は楽器の琵琶の形に似ていることからこの名があるようだが、上空から見ると確かに足袋の形と見ることも出来る。この句は、作者が単に形状の発見だけで句が出来たとは思

えない。琵琶湖は戦国の武将が天下取りを争うために常に舞台となったところだ。特に織田信長は琵琶湖を戦略上大変重要視していた。いざ、戦となれば琵琶湖の水運を利用して兵力を輸送したりする重要な輸送網で、城に港の機能を持たせていた。琵琶湖は戦国武将の足場を固める意味からも足袋という発想を思いついたのかも知れない。

鉄橋に列車を乗せて紅葉川 福島 茂

中七の「列車を乗せて」の表現が面白い。鉄橋の上を走り去る列車ではなく、「乗せて」と言うからには、低速で走っている様子がうかがえる。おそらくは、黒部峡谷を走るトロッコ列車のようなものだろう。黒部峡谷は十月の下旬から十一月の下旬にかけて紅葉の見ごろとなり観光客で賑わう。

鯛割くわれ生え抜きの銚子つ子 座古 稔子

座古さんは、生粋の銚子つ子で、長い間漁業関係の商いを生業とされていたようだが、今は現役を退かれておられるそうだ。かつては第一線で、鯛を割くことも平気でごなし、銚子つ子であることを常に誇りにされていた。

剃刀の刃を替へあぐむ厄日まへ 鶴見 遊太

男性が毎朝使う髭剃り剃刀。髭が濃い人と薄い人では、その使い方も差があるだろうが、替刃の交換時期は人それぞれであるようだ。替えたばかりだと、当然切れ味もよく、間違えれば顔を傷つけてしまうこともある。作者は、その替刃を交換しようと思ったのだが、今日は厄日の前でもあるので、もう少し時期をずらすことにした。

(以下略)